

約16人に1人がかかる乳がん 定期的な検診で早期発見を

教えて
ドクター

大阪プレストクリニック
院長
芝 英一先生



1977年、大阪大学医学部卒業。
アメリカ・ハーバード大学医学
部留学、大阪大学医学部腫瘍外
科助教授を経て、2005年に大
阪プレストクリニックを開業。
日本乳癌学会認定専門医

「非浸潤がん」など、超
早期の発見も可能になっ
ています。非浸潤がんは、
乳管の中ががんとどま
っている状態で、転移の
可能性は低く、手術で切
除すれば完治の可能性が
高いがんです。

ただ、こうした初期の
乳がんは、痛みや違和感
などの自覚症状はありま
せん。自分では分かりに
くい状態の早期のがんを
受診しましょう。

「乳がんと診断される
のが怖いから、検診に行
きたくない」という人が
いるかもしれませんが、
受診を先延ばしにした結
果、乳がんが見つかった
ときには、重症化してい
ることもあります。

特に、40歳代・50歳代
の女性は、家庭や職場で
重要な存在です。万が一
乳がんになったとして
も、自身や家族への負担
が少ない早期に発見でき
れば、その後の生活の質
を変えずに済みます。

自治体では2年に1

日本人女性のがん罹患率のトップを占めている
乳がん。16人に1人は、かかる可能性があるとき
れ(※)、決して他人事とはいえない疾患です。ま
ずは検診を受けることが大切。そこで、大阪プレ
ストクリニックの芝英一先生に、乳がんの発症傾
向と検診について教えてもらいました。※国立がん
研究センターがん対策情報センターによる。

マンモグラフィと 超音波検診の併用を

日本の乳がん発症者数
は、年々増加の一途をた
どっています。年代別で
は、40歳代・50歳代に多
いのが特徴。初潮年齢が
早く閉経年齢が遅い人、
出産・授乳経験がない人、
初産が35歳以上の人など、
生涯の月経期間が長
い場合、注意が必要です。
また、家族で乳がんにな
った人がいる場合や、閉
経後、肥満の人も発生可
能性が高まります。

大阪市の乳がん検診
は、40歳以上の場合、問
診、マンモグラフィ、視
触診を行います。マンモ

クラフィは、乳房を挟ん
で行うレントゲンで、40
歳代は上下・斜めの2方
向から、50歳代は斜めの
み1方向から撮影しま
す。人によって痛みを伴
いますが、乳房を挟み、
なるべく薄くすること
で、しこりの影や、がん
に関する石灰化(カル
シウムの沈着)の影など
が見つかりやすくなりま
す。乳房が張って、痛み
を感じやすい月経前を避
け、月経後3日〜1週間
の間に受診しましょう。

また、乳腺の組織がま
だ多く残っている40歳代
は、マンモグラフィで確
認できないこともありま
すので、超音波検診との
併用をおすすめします。

怖くない病気を 早期に発見できれば

検診にマンモグラフィ
が導入されてから、視触
診では発見できなかった
小さなしこりや、しこり
になる前の石灰化した